

「水俣病」で意見収録

水俣高
文化祭

地元だけに声も複雑

水俣高校文化祭は十八日一般公開したが、社会・新聞部が水俣病を取り上げ、現地の高校生が「水俣病をどう受け止めるか」などの意見を収録して注目された。同時に県外高校生の声も披露されたが、県外高校の型通りの「公害追放」に対し、現地の声は複雑だった。

文化祭は十七日生徒見学、十八日が一般見学で、同日で終わった。社会・新聞部は「水俣病を探る」のタイトルで展示。解説、高校生の声、市民の声などが中心。注目されたのが高校生の声。市民の声は街頭インタビュー形式をとっているが、ほぼノーコメント的

性格の発言が目立った。これに対し高校生はズバリ発言が多かった。

まず、市民の反省を求めるもの

として「水俣病が発生したのは私たちの生まれた二十八年。それだけに胸がしめつけられる思いがする。それから十七年たつて一任派の人には補償金が手渡された。その間の患者の苦しみは計り知れないものがある。そこには水俣

市民の無関心、無気力も関係しているのではなからうか」あるいは「魚をとって食べないよう注意されたにもかかわらず、とって食べた人たちが水俣病患者になった。会社側だけの責任とは言い切れない。

い」また「会社側は無責任すぎる。補償額をもっとふやせ」といった声などなど。ほぼ三つの内容に大別されていた。

その他「早く解決し、水俣病ということばを忘れない。それには私たちも関心を持って、暖かい手を差し伸べたい。しかし私たちの手ではどうすることも出来ない。じれったい」とする生徒も多かった。

これに対し県外の早稲田高校（東京）などでは水俣病という具体例を離れて「公害をなくすよう企業と国の責任を明確にすべきである」といった論議に集約されていた。